

CACS FORUM No.10 発行に寄せて

研究機構長 伊藤 修

科学分析センター機関誌『CACS FORUM』の、節目となる No.10 発行を祝いたと思います。

本センターの前身「分析センター」が昭和 55 (1980) 年に設置されて以来、今年で 39 年を数え、機関誌も本誌の前身時代から毎年度、研究に関する記事の掲載が積み重ねられてきました。その全体像はホームページ (<http://www.mlsr.c.saitama-u.ac.jp/>) で見ることができます。

ホームページでは、本センターの「概要」として、次のように述べられています。

「学内共同利用施設として、各種の物性測定を通して教育・研究のために利用されるほか、分析技術の研究、開発を行うという(中略)役割を担うため、センターには各種高性能の分析装置が設置され、運営委員会の統括のもとに専門委員と指導者によって管理運営されています。」

高度の装置とスタッフによって、薬品の管理、実験廃棄物の回収のほか、学内・学外からの依頼分析を受け付けるとともに、分析技術の研究・開発が積み重ねられているわけです。これらの活動の具体的中身は、本誌に詳しく報告されています。センター・スタッフのご尽力がさらに重ねられ、学内外の研究者等による活用とその成果がますます向上することを、願いたします。

＊

＊

＊

さて以下では、昨年度と同様、この場をお借りして、大学での研究の現状と今後の方向について、個人的な考えを簡単に述べさせていただきたいと思います。

教育・研究は「百年の計」だと思います。とりわけ現在は、AI の開発と応用が急激に進みつつあり、これまで考えもしなかった社会の変化がどんどん現実になりそうな勢いです。自動車は電気自動車や自動運転に向かって、これまた従来の常識とは違った姿に変わってしまいそうですし、エネルギーも再生可能エネルギーの比重を画期的に上げなければならない課題が待ったなしです。もちろん、特定の理工系の技術だけでなく、それらを社会的に誤りなく、人類の厚生向上につながる内容で構想し運用する人文社会的な知恵もますます重要になるでしょう。日本は、人口の急速な減少、経済成長の深刻な停滞という困難な条件に陥っているのですから、上記のようなイノベーションの実現、そして社会的悪循環構造の克服は、他の国々にも増して重要、死活問題であるはずで

このように重要となっている教育・研究が、「もっと効率的に・安上がりに」「競争の圧力をかけて絞り上げ、尻を叩け」という一部の考え方のもとで、危機に瀕しています。これこそ真の危機です。われわれは、しかしこの悪環境に屈せず、流されず、真理追求の歩を進めたい。それが使命だと考えます。

研究は大学というものの根本の根本であり、大学の力を上げるとは、「埼玉大学といえば○○の分野では△△先生がいるところ」という評価で満たすこと。あらためて、本学の全研究者一人一人が努力を傾注しようではありませんか。その環境のサポートについても、昨年来の「時間回復プロジェクト」による研究時間のひねり出し、URAや研究プロジェクト資金支援の体制強化、AI 自動翻訳システムの導入など、きわめて限られた資源を可能な限り動員して全力で措置しようとしています。十二分の活用を願いたと思います。科学分析センターの一層の活躍、そして有効に活用されることも、その一翼を担うものです。

以上、呼びかけの機会とさせていただくことも兼ねて、巻頭の挨拶といたします。